

第189回 山形県社会教育委員の会議 議事録

期 日：令和2年9月17日（木）

時 間：13:30～15:30

場 所：遊学館第1研修室

1 開 会

2 山形県教育委員会挨拶（江川教育次長）

3 出席者紹介

4 座長選出

齋藤委員を選出

5 議 事

(1)令和2年度 主要事業の進捗状況について

資料説明（事務局）

※特に質問なし。

(2)令和3年度 主要事業の方向性について

資料説明（事務局）

<家庭教育・幼児教育・読育等について>

廣木委員

○保護者の研修、相談機会について

新型コロナウイルスで学校が休校している期間中、私どもWith優でも家庭に出向いての支援、フリースクールに通うことも休止した。この時期にゲームやスマートフォンの使用について、管理が難しいと、保護者の方からたくさんご相談をいただいた。

お家の方はお仕事で、子どもたちが家にいる状況で、口頭で使用時間の約束をしたところで、子ども達はパスワードもわかっていてゲームをしているというお話をいただいた。

急な事態であったが、普段からルールをどのように守っていくか。（休校の）後半は学校から宿題もたくさん出たということだが、子どもたちだけで何時から何時までやるということは難しいという家庭も多くあった。自分で自宅で学習する力も含め、家庭教育の力がこのようなところに出てくると感じた。

こうすればよくなるというような一問一答のような答えというのはなかなかないなということ強く感じた。そこで「こうしたらうまくいった。」「こうしたらうまくいかなかった。」というところを保護者同士が話し合い、研修する機会があればいいということ考えた。

高橋委員

○豊かな心の育成について

読育推進ネットワーク研修会、読育推進連携講座を開催していただいたが、コロナ禍時代で、なかなか読み聞かせに入れたい、入りたいとも学校に伺えない。このような状況でも読み聞かせボランティアの皆さんが必要としている講座や研修であるということで発言させていただいた。

最上地区は、学校、保育所、公民館、高齢者施設で活動している方が約320名、25団体ある。最上地区読み聞かせサークル連絡協議会という横のネットワークがあり、最上教育事務所の主管課でけん引してもらっている。昨年度、教育事務所に音頭を取っていただき、協議会が発足した。しかし今年はまだ研修会や総会もできない状況で、このような（読育推進ネットワーク研修会、読育推進連携講座の開催）きっかけを作っていただくことが大事で、活動を見つめ直すきっかけにもなる。

今後、就学時健診の時に読み聞かせをしていただくことで、親も子どもにも興味関心を持ってもらえるように、そしてボランティアへもつながっていけるように新庄市ではやっていく。また「やまがた子育て5か条」のリーフレットも配りながらアプローチしている。これから読み聞かせに入る時にフェイスシールドやマウスシールドをして入っていかなければならないと思うが、読み聞かせの大切さやお話に触れていただけるように、こういった形がいかを今後の課題にしていかなければならないと思う。

佐藤委員

PTAでも家庭教育力向上ということに重きを置いて研修やセミナーを開催している。今年度は学びの機会である研修大会がすべて中止となり、学びの機会が全くない状況になっている。ただ、これからの大会のあり方ということで、動画の配信であるとかYouTubeを使う等、学びの機会を減らさない取り組みが少しずつ動き出している。PTAというと決まった人だけが活動しているといった、負担感を感じる方もいる。ご自分の空いた時間で興味のある研修の動画を見てもらう等、少しでもすそ野を広げていければと思う。

PTAという枠組みでお話すると、子どもが学校を卒業した時点で親も卒業しなくてはならないということが、私はとてももったいないと思っている。その地域に住まう人材として、PTAを卒業しても子どもたちの育成に関わる何かしらのポジションがあれば、まだまだ活躍してもらえる方もいると思う。町内会や子供会等の組織もあるが、そうした組織と連携を取りながら、「PTAだから」、「PTAしかできない」ではなく、地域で子どもたちと一緒に育てていく気運をもっと盛り上げていきたい。

花輪委員

今、PTAの佐藤委員から学校の子供たちの保護者には連携とか、研修の機会があると聞きまして、現実にはそれを知って大変ありがたいと思っている。

現在小学校の教員が、一番困っていることは小学校に入る前の子どもたちの育ちである。特に家庭での愛情豊かな関わり合いがあることで、子ども達は安心して学校で学んでいけることがわかるが、今回のようにコロナ禍で、更に共働きまたは母子家庭などで、お家の方が大変忙しいお子さんはちょっと不安を抱えて、日々学校で生活しているのを感じる。

学校に来てから、私達も個に応じた指導ということで、子どもたちが生き生きと頑張れるようにしたいが、そのためにはやはり幼児教育の段階から、子ども達が安心安全な環境の中で育つことが、この先大事だと感じている。

そういったことをどうサポートしていくかということは行政に任せることなく、地域の力として

もやっっていかなければならないことだと思っている。

今回コロナ禍の一つの例として、小学校にも退職した先生方をお招きして、いろいろご指導いただくような機会があり大変助かった。放課後児童クラブにもご協力をいただいた。

こうした地域の人材、子育て世代が終わった方々をいかに巻き込んで、地域力を高めていくかというようなことも、これから考えていけると感じている。

伊藤委員

今回、私のところ（NPO 明日のたね）で、コロナの休校があった時に、170件ほどの母親からアンケートをとらせていただいて、今集計をしているところである。「働いているお母さん」と「専業主婦のお母さん」とどちらの負担感が増えているか。結果は「専業主婦のお母さん」の負担感が増しているという所に確実に丸を付けている。働いているお母さんは、いつも忙しく、コロナでなくても忙しい。（コロナ禍でも）変わらず仕事があるので結局仕事に行ってしまう、子どもがそのまま家にいるという状況になった。誰が子ども達をフォローするのかという放課後児童クラブであったり学童保育所だったりする状況があったのではないかと思う。

「子育て＝母親がやる」ようなことが、こり固まりすぎているのではないかと私は思っている。自分も母親だが、「なぜお母さんじゃないといけないのだろう。」と疑問に思っている。隣のおばちゃんが子どもを見てくれるような地域の繋がりがある方が、地域は豊かで、子どもが安心して育つのではないかと思っている。

母親の負担が多いのに「母親の愛情を。」と言われてもなかなか私自身、とても難しいと感じる。「働け。」と言われて、その上「母親の愛情もかけろ。」と言われるととてもしんどい。これは私だけではないからこそ今問題になってきていると思う。「家庭の教育力＝母親の教育力」のような形にならないような仕組み作りをお願いしたい。

また、PTAの活動に関しては、私はPTA会長も務めさせていただいた。負担だと言うけれども、それほど負担であるとは思えない。（県の）PTA会長さんならば負担は大きいと思うが、一小学校のPTA会長ぐらいだったら、学校でも準備してくれてそれほど負担感を感じない。「挨拶はちょっと頑張ろう。」くらいでできると思う。役員決めが本当に今大変だ。推薦、ジャンケン、あみだくじ等、役員を引き受けた人が貧乏くじを引いたような状態でしぶしぶ役員をやる。親が小学校で子どもに見せる姿がいやいや役員をやる姿だという状態。子どもに積極的にと言いつつもである。とても矛盾を感じていて、だから、親として親として育っていないかなと感じる。PTA活動は、地域に関わりを持ついいきっかけで、親が学ぶ場だというのに。親として大人として育つにはそれを学び育つ場が必要で、それが地域であり、社会教育ではないかと思っている。親として育つための教育が必要だと思う。また、PTA県大会は、みんなスーツ着て男性しかおらず、女性が参加しにくいように感じた。年に1回の県大会だけでなく、もっとラフな感じで地域の中で親を育てていく、親として育っていくようなこともほしい。

石沢委員

皆さんのご意見をうかがって、幼児教育の重要性について花輪先生からもお話があり、最近幼児教育の方も10の姿（文科省が示した幼児期の終わりまでに育ってほしい方向性）等、改定がなされて方針が出た。目指す子どもの姿が具体的に書かれているがゆえに、そうしなければならないという勘違いされてしまいそうだという危惧がある。

それよりも、保護者も保育士も、子どもたちのいろいろな姿をみんなで見守っていき、先ほど説明をされていたような安心感に繋がっていくと思う。そうしたことができる時間や場所が

地域の中にあるといい。

今コロナ禍の中で、情報はあがるが、どんどん情報だけが詰まっいて、お母さんたちも「これでいいのだろうか。」とすごい不安感に襲われているところもあると思う。だから、ただそれぞれの子ども達の思いやお父さん、お母さんの思いを受け止めてもらえる時間を作っていく。そこに地域の方が入っていただけると安心すると思った。

研修というよりもきっかけになるような場所があると、入り口として入りやすいと思う。

<グローバル化に対応する実践的な力の育成について>

石沢委員

書かれてある事業の内容を見させていただいた際に、自分の暮らす地域のことと同時に、世界で起こっていることに対する視点を広く持つということも、様々な社会の変化を感じるきっかけだと思っている。そういった意味で異なる切り口、山形という地域とどこかを比較したり、交流したりする事業が入ってきて面白いと思った。同じ事業の中で、フリースクールの調査、充実を図る事業はとても重要だと思っているので、それ自体は変えずに、そうしたものが入ってくるとよい。

郷土愛は大事だが、他の地域に行った時に、自分たちの郷土のことを初めて誇りに思えるのかなと思うので、内ばかり見ているのではなくて外も見えて交流を図るような事業があるとよいと思った。

廣木委員

先ほどご紹介いただきました遊佐町の方にWith優から何名か参加させていただいた。直接の担当ではなかったが、参加した子ども達からは楽しかったという話を聞いている。カヌー体験では、ご配慮いただき、子どもたちからも楽しかったという話を聞いている。

今後の課題としては、今年は何名か参加させていただいたが、去年は参加者がいなかったような状況があり、子どもたちにとっては去年行ったからいいやとなりがちである。ゴミ拾いとセットになっているので、場所が庄内であるのは理解できるが、子どもたちの視点でいうと、年によって違った場所から選べると参加する子どもは増えるかと思う。

<郷土愛を育み、地域と協働する教育の推進>

<山形の宝の保存活用・継承>

高橋委員

学校教育の中だけでは収まりきらない探究する力、地域に出て調べるなど地域と学校の連携や協働が更に必要となってくると思う。今、図書館にもどんどん高校生が調べ学習や課題をみつけてやってくる。歴史センターなどにもどんどん来るがどこで何を調べたらいいか困っている。社会教育施設でもどのように情報を提供していいのか？どのように進めていったらいいのかがまだまだ難しい状況であるが、社会教育施設の横の連携が必要だと思う。図書館は相互貸借で公立図書館と県立図書館が繋がってレファレンスを行っている。博物館や美術館、資料館などの施設も横につながり、社会教育施設が一枚岩になっていくことがよい。

また、アーカイブスが作成され、どのように活用されるかが今後の課題になってくる。コロナ禍では有効で安全安心なふるさと教材になっていくと思う。学校教育だけでなく地域の方の社会教育、学びの部分としてもPRできるように推進していくよい。リーフレットの作成があったらカテゴリ毎にどのように視聴覚教材に繋がるかわかるようにすると有効活用できると思う。

須貝委員

高校においても、今探究型学習で、生徒がそれぞれの興味関心に応じて、課題を設定して学んでいる。従来の教科に限られたものではなく、教科書の中に出てくるものばかりでもない。生徒の興味関心も非常に多岐にわたる。これについて少し深く学んでみたいといった時に、どうしても学校の教員の持っている知識では指導は困難になってくる。その場合には、本校でも、例えば山形大学、東北芸術工科大学などの高等教育機関、地元自治体などいろいろな方々から、指導助言をいただくということが非常に多い状況である。今あった図書館や博物館といった社会教育施設に行って気軽に相談できるという仕組みや環境を整えていただけると、探究型学習では非常に助かる。是非お願いしたい。

石沢委員

大学、短大ではコロナの影響でオンラインツールを使った教育をしなければならないという状態になった。使ってみれば、メリットやデメリットがそれぞれあった。社会教育施設でもオンラインツールを使って会議をしてみようとか、世の中がオンラインツール等の様々なメディアを同時に使うということが結構一般的になっているのを感じる。

社会教育施設でも、職員の方が地域の団体の方に、オンラインツールの活用の仕方や機材の使い方についての研修機会を設定できるとよいと思う。

安藤委員

山形大学も前期の授業が全部オンラインになった。Web学習システム、Zoomを組み合わせるという方法で授業を行った。

パソコンでパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを使えばオンラインへ授業の対応はできる。Zoomだと小グループでの話し合いができるので、マスクを着けて距離をとってやるよりも、むしろZoomの中の方が、面識があれば話をする事ができる。

学部必修の授業を80人が受講している中、先生方は小グループを使って話をしながら授業を行った。一年生はほとんど学校に来ていない中で、友達を作って連絡を取り合っていることが7月末のアンケートで確認した。

本学部全体の授業評価はそれほど悪くなかった。ただ、実際生身を相手にしている、子どもさん・保護者に対応する教員養成をしているコースもあるため、対応が難しいところがある。一般の講演に関してはオンラインでできることを確信した。だから、一斉に講座を中止する必要はないと思う。機材もそれほど必要ではない。代替でできる部分は遠隔で担って、研修会を行うことができる。カメラ付きのパソコンがあればできるので研修の中に盛り込んでいただければと思う。

教員の免許更新講習もZoomで行ったが、非常に申し込みが少なかった。それほど大変ではないので、先生方にも周知する機会があればと思う。

青塚委員

オンラインの状況はコロナ禍の中で進んでしまっていて、もう後戻りはない状況だと思う。学校教育はGIGAスクールに代表される動きで一気に進んだと思う。しかしこちらの社会教育・生涯学習は、若干取り残されているように思う。旧態依然とした状況が続いていると思う。

全部一気にやるのは難しいと思うので、拠点化してここだけは最先端を行っているといった所を作ってもらえれば。1ヶ所あれば、オンラインで対応可能なので、巻き返しを図るといった状況が

作れないか。

回 答 (事務局)

社会教育関係で、ICT 関係に特化した施設はないが、県立図書館が今回リニューアルしてアクティブラーニングルームを設けた。コロナ前に設計・構想したのでオンラインだけを想定してはいるが、電子黒板もあり、探求型学習の拠点として使えるようになっている。Wi-Fi も使えるので、様々な形でご利用いただける。

質問とずれるかもしれないが、コロナの中で、我々の方の様々な事業も難しい状況があったが、意外と Zoom も使えることや効果もわかってきた。移動時間も節約できる。地方では、これまで遠方の方から来ていただくのは大変だった。映像だけでは失礼だということもあるかもしれないが、これがスタンダードになれば、内容にもよるが著名な方も拘束時間を短くしてお願いできる。こうしたことが段々可能になってくればやりやすい面もある。地方でも格差が縮小する面もあると思っている。

ボランティアの話題になるが、県の青年の家のボランティア研修を参観した。高校生は青年の家に集まってもらったが、部屋をいくつか用意して、班に分かれて、高齢者のデイサービス事業所にオンラインでつないで、高齢者の方と会話や簡単なゲームを画面越しで行っていた。今の高校生はそういう場でも物おじせず発言ができ、画面に向かって歌を歌う姿に感心した。自分達の頃と比べるとだいぶ変わっているなど感じた。できる取り組みを進めていきながら、さらに検討をしていきたいと思う。

齋藤座長

11月の子どもの生活リズム向上山形県フォーラムもオンラインでやるということである。国もデジタル庁ができ、一気に進んでいくと思う。

新聞委員

私は農業系の仕事もさせていただいている。最近の新規就農者の方は、おじいちゃんが農業従事者で、お父さんとお母さんはサラリーマン、そのお孫さんであるという話が多々ある。

こちらの山形の宝の保存に関しても、おじいちゃんおばあちゃんが頑張っているとその下の世代は「関係ないわ。」と思われる方が多いようだ。一世代おいて次の世代の方に浸透させるようにするほうが続いていくと思う。

私の大曾根地区だが、大曾根太鼓という伝統芸能があり、今の80代の方がずっとやっている。80代の方が頑張っていると50代ではなく、40代の方に繋がっている。また新しいお母さんたちが入ってきて続いている。

また、自分の息子が中学校3年生の時、合唱コンクールで、大曾根小学校出身の子が毎年大曾根太鼓を発表するという決まりのようなものがなんとなくあって、今年は「うちの学年はどうするか。」という話になるそうだ。「去年もしているから俺たちもしなきゃいけないんじゃないの。」というふうに消極的にやるのだが、実際練習してやってみるとこんなに楽しかったんだなという経験ができたようだ。

先日コロナで息子が地元に戻って来ていたが、「山形も結構いいよね。」と言い、「もしも、このまま俺山形に戻ってきたら、やっぱり大曾根太鼓の指導で小学生とかに教えちゃうのかな。」という言葉聞いた時に、子どもの時の刷り込みというのは本当に心に浸みているのだなと感じた。だから、一世代おくということのポイントを考えていただければと思った。

<学校・家庭・地域の連携・協働の推進>

花輪委員

学校の立場からお話させていただく。現状としては、山形市もいよいよコミュニティ・スクールを立ち上げようということで、2年の期限で動き始めている。コーディネーターとなる人をどう発掘するかということが課題である。あとは、そのコーディネーターについて、今はボランティアという形をお願いするしかないが、ある程度、予算化されると良いと思う。現状は、遠慮してしまって、教頭先生や担当教員がかなり忙しくなることが予想される。今、本校で取り組もうとしているのは、コミュニティ・スクールを立ち上げる前に、コーディネーターとなる方をお願いして、地域の宝物や人材発掘のデータバンクを作ることである。そういった実績をその方に作っていただきながら、コミュニティ・スクールが立ち上がった時に、コーディネーターとして活躍していただく道筋を作りたい。学校で出来ることから探って、実態に応じたコミュニティ・スクールを作っていきたい。

藤川委員

私も、遊佐中学校のコミュニティ・スクールの審議員になって3年目になるが、日中に会議があるので、中学校の先生、校長先生、教頭先生がすごく頑張っている感じがしている。社会教育関係の先生もいるが、メンバーの皆さんも60代以上の方が半数を占めているが、これからの教育を担っていくのは、40代、30代とか、もっと下の世代の方々だと思う。これからの遊佐の中学校を考えていくのだから、中学生がいるべきではないかとか、なぜこんなに若い人材がいないのだろうと思うのだが、それは、(審議員の方は)働きに行っている中で時間を割いて来るわけで、しかも、なりたいたいってなる人ではなく、頼まれてなる人なのである。教育にお金は出せないとか言っている話ではないと思う。そろそろ、そのあたりを変えていかないといけないのではないかなと思う。大学生も、こういうことに興味がある学生さんもいるはずで、特に山形は、山形愛がすごく強い方々が多くて素晴らしいと思うので、そういう方々もどんどん呼ぶと良いと思う。若くても20代後半で、私が一番若いみたいだが、社会教育の担当の方から若い世代に声をかけていただくとか、もっともっと若い世代が入れるような体制になると良いのかなと思った。

佐藤委員

地域の人材について先程も少し触れたが、これから、学校教育の中でもZoomを使うなど、先生方も新たなスキルを身につけなくてはいけない。カメラの前で教えることも今後どんどん出てくるわけであり、年配の方は、覚えるのもなかなか難しい面もあるのかなと思う。そうなってくると、若い先生方がそういうところに特化してやる。そして、従来の教育を、退職された教員の皆様や地域の方々との触れ合いの中で、子どもの育成をしていくべきだろうと感じている。

安藤委員

昨年度の卒業生が、4月から宮城県で小学校の教員として頑張っている。彼と18校くらい小学校や中学校を回って、地域との連携の実態を聞くということを行ってきた。コミュニティ・スクールを導入している学校や地域学校協働活動本部が立ち上がっていて地域学校協働活動推進員がいる所も含めて回ってきたが、コーディネーター次第ということを改めて感じた。先程、佐藤委員からあったように、PTAの方は、学校や地域のことがよくわかっているという点で、コーディネータ

一に適役ではないかと思う。是非、コーディネーター、あるいはボランティアで関わっていただきたいと、学校や各市町村教育委員会から声がけしていただくことが重要だと思う。

もう1つ、高校においても地域学校協働活動を展開させるようにということで、モデル事業が2年前から続いている。学校、特に高校の地域貢献、あるいは、高校を中心として地域の後継人材を育成していくことを非常に重要視している。昨年、高P連の東北大会に助言者として登壇させていただき、そこでも話題になったことは、高校のPTAの特徴的な活動は、PTAの役員の方がいなくなってしまうと途絶えてしまうということである。やはり小中学校と同様に、コミュニティ・スクールに加えて、地域学校協働活動、コーディネーターが常にいると良い。進学校、実業高校など、それぞれ地域における役割は違うが、地域と関わりをもつ時に、校長先生や教頭先生、教務主任などの先生方が関係団体と直接連絡を取っていて、その方が異動すると関係が切れてしまう、ということにならないように、コーディネーターがいると良い。

コミュニティ・スクールについてだが、多い所だと月1回運営協議会をやっている一方で、年に1回しかやっていないという形骸化している所もある。時間の確保などを考えた時にPTAと結びつく大きい。コーディネーターの重要性も大きい。学校毎の対応が違うのは、校長先生等の判断が違うためと思われる。こういった事業の趣旨を、校長先生や実務担当の先生方に周知していく機会を、やはり改めて作っていくべきではないかと思う。昨年度、山形市の中学校長会で話をさせていただいたが、それなりに反応があったような気がする。そのような機会は、やはり持った方が良いと思う。

須貝委員

本県では、小国高校が、県立高校では唯一コミュニティ・スクールを導入している。更に、文部科学省の「地域との協働による高校学校教育改革推進事業」で、小国高校と性格は違うが、本校もグローバル型ということで取り組んでいる。この事業の最終目的は高校教育改革であるが、高校教育改革を進める中で地域をより活性化していくという、両方を狙った事業である。小国高校の場合は、県立高校であるが、管理機関が県ではなくて小国町が対応している。地元の自治体と県立高校が連携して、地元自治体からお力を頂きながら地域に対する理解を深めるような教育である。そして、高校生が地域に出て行って、地域に貢献する活動に取り組み、学びを豊かにするというところで進んでいる。コーディネーターについて誰をどう配置するか非常に難しい問題であると理解している。県立高校なので、本来であれば、県で配置すべきなのかとか、あるいは、地域の活性化という視点であれば、地元自治体で対応すべきなのか、どちらがという結論は出せないと思うが、働き方改革もある中で学校教員だけでは対応しきれず、コーディネーターのような人材は必要不可欠であると感じている。

安藤委員

小国高校のコミュニティ・スクール、学校運営協議会の委員をしており、今年で3年目になる。今年の秋の県の社会教育大会でも、小国町の総括コーディネーターの渋谷先生にお越しいただき、所管を超えて、保育園から小中高まで通すという試みについてお話しいただく予定になっている。実際に始まった時の学校運営協議会は、小中と高校の間というのは、上手くいっていなかったと思う。3年くらいかけて、うまく歩み寄っていくという期間があり、町の様々な行政機関が関わっていく中で、コーディネーターの重要性を改めて感じている。不登校などに関しては、特に福祉の領域との関わりも必要である。このように所管を超えて通すということ、小国町では試みているようだ。

齋藤座長

コーディネーターの重要性ということであるが、各地区で「地域とともにある学校づくり研修会」が行われると思う。そのような中で、コーディネーターについても話があれば良いのではと思う。

<青少年の地域力の育成・地域活動の促進>

須貝委員

先程、遊佐高校の話があったが、少子化が進んで定員確保がなかなか難しい。また、職業に関する専門学校、例えば農業高校等も、生徒を集めることがなかなか難しい。一方で、地域の学校で育て地域を担っていくという自覚やスキルを身につけてもらわないと、地域の発展は望めないと思っている。そこは危機感を持ちながら、それぞれの学校でも取り組んでいると思う。そのような課題を抱えるに至った原因としては、少子化で子どもが減っていることがあると思うが、その少子化の流れを何とかできないかという1つの考え方として、比較的年が近い、若い先輩が1つのロールモデルになって、地域で格好よく活躍している姿を高校生に見せることは、効果的なのではないかと思う。自分もああいう人になりたいと思う人と一緒になって、高校生が活動するというのは、非常に有意義なことではないか。そのきっかけ作りとして、こうした事業の推進充実をお願いできればと思う。

藤川委員

遊佐町の少年議会が、今、庄内地域では一番活発に活動しているのではないかなと思う。企画会議も、実行委員が毎週のように集まって検討を行っているが、少年議会という団体が既にあるので、遊佐高校とか酒田光陵高校とかN高校とか、色々な学校の生徒が関わっている。今は都市部から中学生を高校に呼ぶということをしている。県外から来た子も少年議会に3人参加してくれていて、すごく良い影響を与えてくれていると感じている。

県外の子が、なぜ未来留学を通して遊佐高校に来たかということ、格好良い大人がいたというのが一番の理由である。特に遊佐高校は、去年は存続のために必死にやったが、実際に生徒が集まって来ると、公立高校でも、県外からでも来たくなるような魅力的な高校づくりができるという自信があった。私も移住してきた者として、遊佐で魅力的な人がいたとか、いい生活ができるイメージができた、という感じである。ただ、今、県の決まりだと、定員を超えた場合10%しか県外の人が入学できない等という規制がかかっている。人口減少と言っているのに、県外から魅力的だと思って入ってきてくれる人に対して規制がある。遊佐高校は、地元の子はややネガティブな理由で入ってくる子もいる中で、どちらかというポジティブなイメージで入ってくる友達がいると、プラスの影響を受ける。逆にネガティブな子が多すぎると、ポジティブな気持ちで入ってきたのに、負けてしまう。そんなことを感じている。

中核人材の取組みは素晴らしいなと思っていて、格好良い大人が庄内にいると思うと、自分もそうなりたいと思ってくれると思う。庄内の場合は、少年議会の子たちが何十年もやってきているので、プロジェクトのやり方とか担当の方たちも上手く進められていると思うが、きっと他の地区の方々は、プロジェクトのマネジメントについて詳しい方、経験のある方でないかと、結構運営が難しいのではないかと思う。

お金のことばかりで申し訳ないが、実際にやってみると、たとえば、こういう会議だと、2時間の間に数分喋る中で、謝礼金が1万円だとすると、青年ファシリテーターの方は、2時間以上、魂

込めて子どもたちと接して、そのためにいろんなことを考えるけれど、庄内の場合だとそれで 2000 円程度である。若い力が大事だという割に、中核人材の予算も、他と比べて予算がすごく少ない。若者を資源だと思っていてくれるのであれば、そこにもっと投資をするべきだと思う。今のままだと、すごく素晴らしい取り組みだが、その労力で続かないということもあるのかなと思う。

青塚委員

7月の大雨について取材をしてきたが、現場に行ってみると、高校生が結構いた。学校で指導した面もあるようだが、意外と皆さん生き生きと動いていて、志が高いなと思って見ていた。こういってことが入口となって、ボランティアに繋がっていくといいと思った。ただ、県内のボランティアを繋ぐ仕組みもあるようだが、なかなかうまく機能していないようである。何か繋ぐプラットフォーム的なものを作ってあげられると、この高校生たちは、先々、自分たちの力を地域のために活かしてくれるのではないかと感じた。

安藤委員

昨年の、最後の社会教育委員の会議の議事録を見たが、YY ボランティアについて、青年の家の YY ボランティアのページで、山形県の地図にここにボランティアサークルありますよ、と書いてあって、クリックすると情報に飛ぶような仕組みになっているはずなのだが、相変わらずリンクが切れている。情報の更新をお願いしたい。ただ、もしかして活動実態が伴って来ていないのではないということも気になる。私が着任した頃、10年前くらいに、相当テコ入れしていた記憶がある。卒業して帰ってきて、サークルを立ち上げるということが、ちょうど行われていた時代であったと思う。10年経って、それぞれ結婚したり子どもができたりで、こうした活動はあまりしていないと思うが。活動をしていないならいいので、その実態を示してもらいたい。情報の精査と提示をお願いできればと思う。

石沢委員

藤川委員の発言に同意する。若い人達はとても忙しいのが現状。お金を稼ぐのに必死である。「学校現場に行きたいけど、平日仕事です。」という方もいる。「じゃあ、夜間に。」となった時に、そのボランティアをするような人達は、「働き方改革なので、残業しないで、土日出勤しないで。」と言われるような状況である。「じゃあ誰がコーディネーターになってくれるんだろう。」となった時に、ちゃんと仕事としてお給料もあって、ということになると、意気込みや仕組みが変わってくるのかなということが1点である。

あとは、中高生ボランティア、YY ボランティアにも関わらせてもらったが、各市町村の社会教育や生涯学習担当の職員の方が、色々な仕事を同時に抱えながらボランティアを担当していることが多い。先程、安藤先生の話にもあったが、サークルがなかなか続かない、高校生も忙しい、塾に行くなど多忙化しているという印象を受けている。このことと繋がるかわからないが、今まで YY ボランティアだと各市町村に必ず1つ、高校生がリーダーシップをとって実施していたと思うが、もう少し広域的に、例えばちょっと隣の市町村と繋がって、Zoom で会議をしてみようとか、この日のイベントをみんなで一緒にやってみようとか、オンラインツールも取り入れていくと良いのではないかな。オンラインツールを活用すると、担当の方の負担が軽減されたり、広いエリアで交流していくというネットワークができたりするのではないかなと思った。

齋藤座長

山形県の社会教育の歴史を見ると、青年学級関係と YY ボランティア関係というのは、青少年教育の目玉になっていたと思う。ところが、去年今年を見ると、ここの県予算がぐっと減っている。次世代の地域づくり中核人材育成が新しく始まって、そっちの方にお金を取ったのかなと思うが、Y ボラの歴史というものを、もう 1 回考えてみる必要があるのではないかと思う。懐古主義ではないが、私は昭和時代から関わっていて、昭和時代の時にこんなことがあった。ボランティア養成講座が 7 教育事務所、4 つの少年自然の家を中心に実施していた。5 月か 6 月頃に、2 泊 3 日で少年自然の家で行った。金曜日の午後から日曜日にかけてである。その当時は、土曜日は学校が休みではないので、養成講座に参加する高校生は公欠扱いである。ということは、社会教育課と高校教育課の話し合いで、たぶん公欠にするということになったのではないかと思う。その時の県教委の意気込みというのがあったと思う。高校生たちをこういうふうにするんだ、社会教育だけでなく、高校教育も一緒になってやっていく、そうした意気込みが、是非これからも欲しい。新しい総理大臣は、縦割り行政をなくすと言っている。そういうことを考えると、縦割りだけではだめで、いろんな所とネットワークを組みながらやっていくことを考えていく必要がある。県教育委員会でも話し合っただけであればと思っている。

<地域の教育力を高める生涯学習環境の充実>

安藤委員

社会教育主事の養成に関しては、今年から「社会教育士」の称号も取れるようになっている。文部科学省から、山形大学では社会教育主事の有資格者の方が追加分で「社会教育士」を取れる講習を、今年実施するかという問合せがあった。コロナ禍の状況であるので、今年度の開催は見送ったが、来年度以降、社会教育主事有資格者の方のリカレント的なことをできたらと思う。現在、社会教育士の資格取得のために通われている方がいるが、そういった仕組みをもうちょっと簡便にできないかなと思っている。決まったらお知らせするので、県内での周知をお願いできればと思う。

もう 1 点が、夜間中学についてである。昨年度末までは議論が盛り上がっていたが、コロナで止まってしまったような感じがある。夜間中学に関する調査の再検討があったと思う。令和 6 年度までに各都道府県に開設ということがあるが、もしよろしければ、義務教育課長から、今の状況を教えていただければと思う。

回 答 (事務局)

夜間中学について、昨年度、ニーズ調査のアンケートを実施した。1,225 通をチラシとともに各市町村の福祉部局にある相談窓口や教育委員会、若者相談支援に関わる NPO 法人や国際交流協会など、幅広く配布した。その結果、回答が 42 通で、その 9 割が村山地区からの送付であった。内容としては、夜間中学で自分が学んでみたいという回答が 7 通、そういった方が身近にいるという回答が 22 通、思いつく団体等があるという回答が 11 通ということであった。その後、村山地区の 2 つの市町村教育委員会を訪問し、調査結果をお示ししながら、情報共有を図った。また、今年の 1 月に担当者が文部科学省の夜間中学の説明会に参加して、国の動きや他の都道府県の動きを把握してきた。合わせて、実際に都内の夜間中学を視察してきた。先に行った調査の「学んでみたい。」という回答が 7 通ということでは、十分に実態を把握しきれていないと考えているので、現在は、色々な所に出向きながら、どのような調査をすると本当の実態を把握できるのか検討して進めていかなければならないと考えている。

安藤委員

先行事例でも、なかなか調査では出てこない部分があるようだ。仙台では、来年度、再来年度あたりに夜間中学を開設する見込みであると聞いている。また、徳島では、県立中ということで夜間中学を開設する動きがあるようだ。子どもから大人に幅広く学習支援を行っているような団体等に確認することも必要ではないかと考える。ネットワーク化がうまくいっていないところもあるように感じているので、ぜひ情報共有していただければと思う。

廣木委員

今回のコロナによる休校期間中に一番気になったこととして、「何をして過ごしているの？」と聞いた時に、「本を読んでいる。」と答えた子が、私が関わっている子の中には一人もいなかったということである。私が子どもの頃にはなかったような、スマートフォンや動画を見るサイトなどがあり、変わってきている部分があると思う。また、地域性の問題だが、子ども達だけで図書館に行けるような交通機関がないことも課題かなと思っている。私は、米沢に住んでいるが、新しくこんなに素敵な県立図書館ができたが、米沢の子ども達は知らない子が多いのではないかと感じている。実際に足を運べるような仕組みづくりをお願いしたいと思う。

齋藤座長

その他、色々な課題が出ているが、たとえば派遣社会教育主事の問題、また、研究セクションの設置について、私もこの2つには大賛成である。検討していくことが必要かと思うので、よろしくお願いしたい。

<社会教育全体に関わること、その他>

高橋委員

今、会議をしていて、様々なキーワードが出てきた。「地域の学び」だったり、「人生100年時代」、「高校教育改革」、それから、「オンラインツールの活用」。私の方から2つご紹介させていただきたい。

お手元にパンフレットを配らせていただいた。新庄・最上ジモト大学のパンフレットである。今年で4年目になるが、今回のコロナ禍において、今までやっていたジモト大学、リアルに会って対話をして、課題解決に向けて発表するということが、今年4月にはできなくなって、ジモト大学はもうできないのではないかといいところであった。でも、地域の人たちや行政の皆さんも、ここで地域の学びを止めてはいけないということになり、オンラインツールを活用して、オンラインジモト大学を実施することになった。オンラインでやるプログラムやオフラインで今まで通り3密を避けながら行うプログラム、あるいはオンラインとオフラインのハイブリッドのプログラムがある。何とか地域の学びを繋げていきたい、というプログラムを全部で33講座実施することとなった。この中には、先程青年ファシリテーターの話があったが、最上教育事務所の社会教育課で「てれ・ぼら」プロジェクトということで、オンラインでボランティアとして何ができるのか、そして、青年ファシリテーターの皆さんは、どのように高校生を引っ張っていくのか考えてもらうようなプログラムを提供している。このような形で、地域が、オンラインでもできる、リアルに会っても高校生と一緒に学べる、というような地域にどんどん変わってきている。

もう1つ、パンフレットに漫画があるが、これは昨年ジモト大学に出ていただいた高校生、今は専門学校を目指している方から、ジモト大学で感じたこと、地域の方とどんなふうに繋がったのか

ということ、楽しく分かりやすく描いてもらったものである。今年は何が違うのかということ、今までは地域の方や行政の方が提供して、高校生に参加してもらいながら、地域のことを知ろう・学ぼうという方針だったが、そうではなくて、高校生が参画しながらプログラムを考えていこうということも、星印のプログラムに入っているの、ここが1つ1つブラッシュアップしたプログラムになっていると思う。ジモト大学の実施にあたって、地域の学びも大変必要になってくる。

これからどういう風に地域が一枚岩になって子どもの学びを繋げていくかということで、もう1つご紹介させていただきたい。「学びの土壌づくり」ということで、地域の退職された先生方が、何か自分たちが役に立てないか、自分たちも学んでいかなくてはいけないのでは、ということで立ち上げた勉強会についてである。第1回目は、小国高校の実践例や隠岐島前高校などと変わらない事例を、9月10日に広島県立大崎海星高校の高校魅力化コーディネーターの方から、地域や行政がどのように変わっていったのか、お話をいただいた。第2回目が、教育の在り方ということで、文部科学省の高等学校の教育改革に携わっておられる田崎先生から、教育の場所から地域・学校・家庭がどのように変わっていくのかというお話をいただく。0歳から高校に至るまでの一連の地域の学びとか、同じように街づくりを行っている方からのお話を予定している。まだ参加可能で、こちらにもオンラインになる。前回参加していただいた方の中には、70歳の方もいる。Zoomの使い方もサポートしながら、学びの土壌づくりということで実施している。

齋藤座長

私から最後に1つ。少年自然の家のことである。指定管理になって、その評価がどうなっているのかということである。あと、昨年、私の町内のサロンと真室川町のサロンと合同で、神室少年自然の家で研修会をやった。研修会には60名くらい集まった。参加者は「こんな良いところがあるのか、初めて来た」などと話していた。やはり少年自然の家は、子ども達だけではなくて、生涯学習施設、一般の人も利用できることをもっともっと広報していかなくてはいけない。

(3)その他

6 連絡(事務局)

・第190回県社会教育委員の会議は、令和3年2月8日(月)に開催する予定である

7 閉会